



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第46号臨時増刊
Author(s)	デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2013-11-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73598
Type	journal
File Information	DRFmonthly_46s.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第46号臨時増刊

No. 46 special issue November 2013

【特集1】総力レポート DRF10

【特集2】第3回 SPARC JAPANセミナー2013 レポート

特集
1

DRF10

第10回DRF全国ワークショップ 躍動するオープンアクセス

総力レポート

DRFのメインイベント全国ワークショップも、今年で回を重ねること10回目。
この記念すべきDRF10（だーふてん）の内容をお伝えすべく増刊号を編成しました。総力をあげてレポートします。

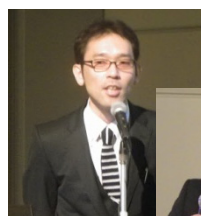
第1部 博士論文公開に対する取り組み～JAIRO Cloudの利用推進など

4月より学位授与大学に義務付けられた博士論文のインターネットによる公表、それを切り口として、第1部では日本及び世界の機関リポジトリ（IR）の動向と事例が報告されました。まずは、第1部テーマにもあるJAIRO Cloudについて、NIIの前田・加藤両氏より、登録の実演にまで踏み込んで紹介されました。

IRの概念的な話からJAIRO CloudのIRシステムソフトWEKOの詳細まで、密度の濃い内容でありながら、一貫してその導入・管理の容易さ、簡便さが際立つ紹介でした。



左：満員の会場
右上：前田氏（NII） 右下：加藤氏（NII）



左から中山氏・真中氏（筑波大）
林氏（名古屋工大）森氏（お茶の水女子大）

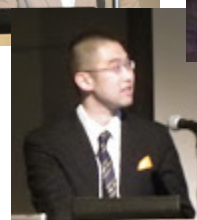
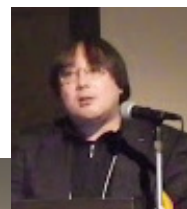
続いて、IRにおける博士論文公表及びその他の取り組みについて、名古屋工業大学、お茶の水女子大学、広島大学、奈良県立医科大学、聖学院大学の5大学より事例報告がありました。

前半の名古屋工業大学、お茶の水女子大学の報告は、第1部のテーマである博論関連の事例で、博論のIRでの取扱いに関して、実務に則した具体的な報告となりました。後半の広島大学、奈良県立医科大学、聖学院大学の発表は、IR業務全般の活動報告で、各々のIRの特色や先進的な取り組みなどの発展的なことについて、幅広い報告がなされました。

もはや毎年恒例となっている事例報告においては、IRでのETD公表というテーマは、各館にとって重要な課題でありながらも、報告の場を設ける切り口・きっかけに過ぎないとも感じられました。

第1部を通してみると、IRの導入から他国の状況、先進的な取り組みと、IRを取り巻く現状を広く見渡せるものとなりました。国内IR数が300を超えようかという今、このような内容を鑑みると、基盤としてのIRが成熟しつつあることを確認すると同時に、「これからのIRはどこへ向かうのか」という第3部のテーマに、至るべくして至る、ということを感じさせるセッションでした。

文：中谷昇（鳥取大学）



左から
松本氏（広島大）
田川氏（聖学院大）
和田氏（奈良県医大）

第2部「激動する学術コミュニケーション2013」では、「Altmetrics」と「Green×Gold」をテーマとした講演ならびにパネルディスカッションを行いました。

Altmetrics

Altmetrics のセッションでは、「Altmetrics の概要と機関リポジトリへの導入事例」（大園隼彦／岡山大学）と「日本版Altmetrics の開発とその示唆するもの」（佐藤翔／同志社大学）と題した講演がありました。Altmetrics とは、ソーシャルメディア等における研究成果への反応をリアルタイムで収集し、そのインパクトを定量的に表示する新しい研究評価指標で、引用等の従来の指標を補完する働きを期待されています。Web 上で多様な利用傾向をはかることができるため、今までとは違った視点による学術論文の評価の可能性を感じました。



左：大園氏（岡山大） 右：佐藤氏（同志社大）

Green×Gold

「Green×Gold」のテーマについては、「オープンアクセスをめぐる最近の動き」（西菌由依／鹿児島大学）、「国内におけるGold オープンアクセスとAPC の情勢」（根本輝子／バイオメド・セントラル）、「APC 支出額調査事例」（鈴木雅子／旭川医科大学）と題した話題提供ならびに講演がありました。学術論文のオープンアクセスについては、ここ数年、APC（Article Processing Charge）をはじめとした出版社による著者支払型のモデルが着実に増加の傾向にあるようです。オープンアクセスのコスト問題についてはもちろんですが、これまでのセルフアーカイブによる手法とは異なった視点でも、今後のオープンアクセスについて考える必要があるといった印象を持ちました。



上左：西菌氏（鹿児島大）
上右：根本氏（BioMedCentral）
下：鈴木氏（旭川医科大）

Discussion

パネルディスカッションは、これらの話題について、会場の参加者への二者択一の質問を中心に進行しました。Altmetrics やAPC について、今回はじめて耳にした参加者もあったようですが、積極的に取り組もうとする姿勢が、会場の雰囲気からひしひしと感じられました。

今後も様々な利用の可能性がうかがえる学術論文ですが、「これからどのような方向でオープンアクセスを実現していくべきか」という問題意識を共有するよい機会になったと思います。

文：大園岳雄（香川大学）

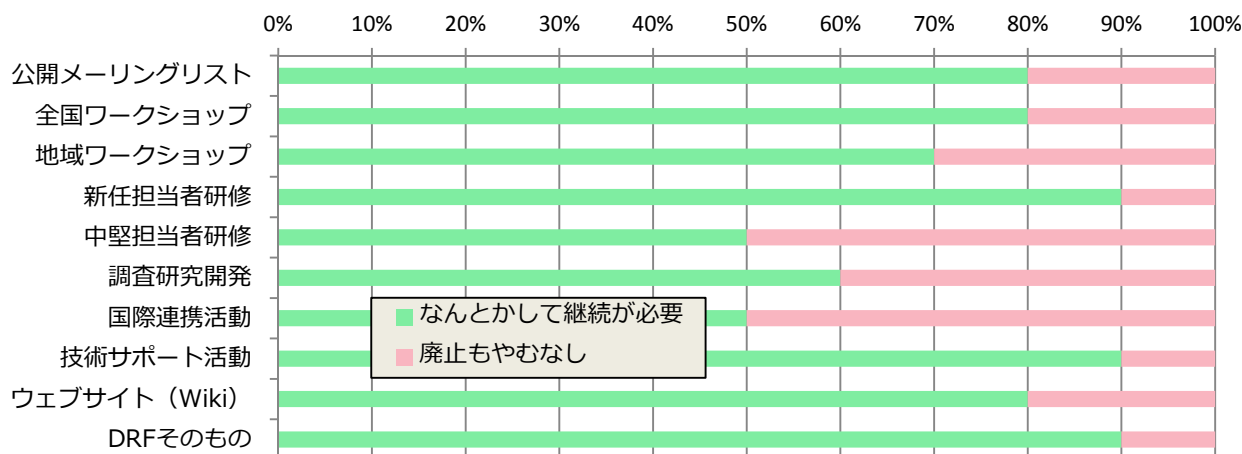


ことしも
フロアの皆さんに
YesとNoのカードを
あげてもらいました



第3部 機関リポジトリはここまで来た、そしてどこへ向かうのか

第3部では、まず、前半を総会と位置づけ、企画ワーキンググループ主査の三隅健一（北海道大学）からの報告に基づき、これまでのDRFの活動と運営体制を概観した上で、財政基盤を含めた今後のありかたについて議論しました。続いて、千葉大学CURATORの立ち上げ以来、10年あまりにわたって我が国の機関リポジトリの発展に携わってきた尾城孝一氏（現・国立情報学研究所）から講演をいただき、機関リポジトリ運営の将来展望について会場全体でのディスカッションを行いました。



上図は、DRFの基本的活動のうち、機関リポジトリ業務を続けていくうえで必須であるものは何かという問いに対する会場の回答です。諸々の活動には当然ながら費用を要します。さらに具体的に、「仮に年間1000円の年会費を納めるとしても全国ワークショップの継続は必要」と答えた参加者は80%、同じく「公開メーリングリストが必要」と答えた参加者は50%に上りました。会場からは「費用負担にはそれに見合う明確なメリットが必要」、「DRFによって大学を越えた実務担当者の横のつながりが生まれた。職員が少なくなる中、人材育成の意味でそれそのものがメリット」などの声がありました。一方で、約80%の方が、「費用負担が生じたとしてもDRFの活動自体はオープンであるべき（参加機関の所属職員のみがメーリングリストや研修、ワークショップ類に参加できる、等の制限を加えるべきでない）」と考えていることもわかりました。

さまざまな矛盾を踏まえつつも、グラフに見られる優先度合等を勘案の上、安定的な財源確保のための議論をさらに深めていく必要があります。



これを踏まえ、今後の機関リポジトリに期待されることとして、①コミュニティの形成、②システム基盤としてのJAIR Cloudの強化、③教育研究成果の更なるオープンアクセス化、④オープンアクセスのポリシー策定、⑤機関リポジトリの戦略的な活用が挙げられました。③教育研究成果の更なるオープンアクセス化を進めるためには、『教員のワークフローの近くにいる、研究支援や教務との関係を図書館が深めることが重要ではないか』との意見がありました。

尾城氏は『失敗に学びつつ、これからの10年を考える』との演題で、我が国の機関リポジトリが世界有数の発展を遂げたことを数字で示し、しかしこの10年間に於いて至らなかった点として、①「図書館」リポジトリにとどまったこと、②グリーンOAが進まなかったこと、③ポリシーが弱いこと、④文献リポジトリの壁を越えられなかったこと、⑤CSI委託事業の成果の展開ができなかったことの5点を指摘しました。

今後の重点的な取組み(私案)

1. コミュニティの形成(人)
2. システム基盤(システム)
3. 教育研究成果の更なるオープンアクセス化(コンテンツ)
4. オープンアクセスのポリシー策定(ポリシー)
5. 機関リポジトリの戦略的な活用(サービス)

1. コミュニティの形成

- ・コミュニティを中心として、技術、知見、経験の共有を強化するとともに、人材育成、国際連携、社会連携を進める。
- ・DRF、地域共同リポジトリ、遺跡リポジトリなどの既存のコミュニティの継続的な活動に加え、JAIR Cloudユーザグループなどの新たなコミュニティの形成を支援する。
- ・複数のコミュニティが重層的に活動することにより、機関リポジトリを推進するためのロバスタな人的基盤を構築する。

オープンアクセス時代の研究成果のインパクトを再定義する ～再利用とAltmetricsの現在～

第3回SPARC JAPANセミナー2013、テーマは「オープンアクセス時代の研究成果のインパクトを再定義する：再利用とAltmetricsの現在」でした。

研究データを再利用するためのサービスを提供しているfigshareの設立者Mark Hahnel氏とaltmetricsという研究成果の新たな定量的評価指標を提供しているImpactStoryの共同設立者であるJason Priem氏を同時に招待するという豪華な内容でした。

以下に当日の概略を紹介します。Webネイティブな時代に突入し、研究論文だけではなく、その元となる研究データ等の公開・共有が当然となる時代になりつつあります。例えば、NSF、NIH、NEHのような研究助成団体は研究者に対して時宜に適った研究データの公開を期待しており、ECも公的資金の助成を受けた研究データのオープンアクセス化を求めています。イギリスではDCCを中心に研究データのキュレーションの技術を深め、大学図書館もその環境に対応しつつあります。

ライフサイエンス系のデータについてはDryadやGenBankのようなデータリポジトリが存在しており、また日本においてもライフサイエンス統合データベースセンター（DBCLS）を中心に環境が整いつつあります。しかし、全体としては組織的な研究データ管理はまだ途上であり、イギリスにおいても公開を奨励している助成団体の大部分がデータセンターのサポート体制までは十分に整えていないようです。

figshareはこのような状況を改善する可能性があります。一方では研究データの再利用のインパクトを十分に測定できない、つまり研究者にデータを共有するインセンティブが少ないという問題点もあります。

例えば、研究データについても論文の参考文献リストに載せることが推奨されていますが約8割の論文は載っておらず、結果、引用数を正しく測定できていないようです。また、引用は利用の一面しか反映していないという問題もあり、それについてはaltmetricsを利用することで、学术界と社会一般のそれぞれに対して多様なインパクト（閲覧、保存、議論、引用、推薦）を補完することが可能になると指摘されています。

Mark Hahnel氏はリユースファクターという考え方を提案していますが、それを実現しつつあるサービスの一つが、ImpactStoryといえます。Web時代の研究ではWeb上に何らかの足跡が残っており、研究者にORCIDを、研究成果にDOIという永続IDを付与することで、全ての研究者の全ての研究成果の全てのインパクトを追跡することが可能になるかもしれません。

今後、研究データ管理やインパクトの再定義の考え方を研究者に勧めるには図書館員による啓蒙活動も重要になるだろうと指摘されました。

図書館員は単に研究成果のオープンアクセス化を目指すのではなく、時代に適した研究システムのデザイン（そして結果としてのオープンアクセス）への貢献を目的とすべきなのだろうと思いました。IRにaltmetricsを適用することがはじめの一歩となれば良いです。



上左: Jason Priem氏 (ImpactStory) 上右: 池内有為氏 (筑波大)
下左: 坊農秀雅氏 (ライスサイエンス統合データベースセンター)
下右: Mark Hahnel氏 (figshare) 写真提供: 国立情報学研究所

セミナーの詳細: <http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20131025.html>

文: 大園隼彦 (岡山大学)

次号予告

2013年 DRF
10大ニュース
ほか



facebook <http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

読者アンケート http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

お問い合わせ gekkandrf@gmail.com



【編集後記】10年（回）ひと昔。
でもまだまだやることいっぱいあるぞIR。（NYOZ）